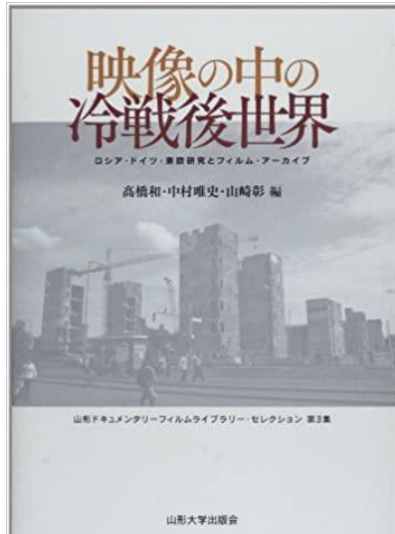


はぎの会本棚 2021 春



高橋 和、山崎 彰、中村 唯史 編集
山形大学出版会

『映像の中の冷戦後世界：ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』

高橋 和 (国4)

山形国際ドキュメンタリー映画祭は、1989年から始まり、すでに30年以上の歴史を持つ。30年目となった2019年の映画祭には130か国から2371本の応募があったそうである。世界全体で約200の国があることに鑑みれば、世界の三分の二の国から応募されたことになる。映画祭30年間の応募作品は山形市のビッグウイングにある「山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー」に保管されており、個人でも見ることができる。

このフィルムライブラリーに保存されているロシア、東ドイツ、東欧諸国のドキュメンタリーフィルムは、1989年の社会主義体制の崩壊から新たな社会を作っていく過程を記録しており、歴史資料としても貴重なものである。この貴重な資料を知ってもらいたいという思いで作成されたこの本は、1989年から2013年までのロシア・ドイツ・東欧を扱ったフィルムのカタログ（抄訳付）と著者たちが面白いと思った映画10本の解説・論評を収めている。ドキュメンタリー映画の鑑賞の仕方はいろいろあるが、国際関係を専門とする著者の目から見ると、コソヴォ紛争の際の国際政治の舞台裏がアハティサリなどの交渉の当事者の言葉で語られ（「第四の席」フィンランド・ノルウェー共同作品）、一般的にはロシアのコソヴォへの介入として知られているものが、実際にはロシアがコソヴォ紛争に引きずり込まれる状況が明らかにされていて、驚かされる。通常語られてきた事実を「映像」によって反転させるものである。また社会主義体制崩壊後の社会主義者に対する市民の暴力が第二次世界大戦終了直後のドイツ人に対する暴力とシンクロされている映像（「ペーパーヘッズ」スロヴァキア）は、勝者と敗者が逆転する瞬間を捉えて、社会主義体制への糾弾だけでなく、抑圧された人々の感情を普遍的にとらえようとする視点が鋭い。

ドキュメンタリー映画は、事実が基本となっているので映像が撮影された社会の状況がそのままに記録されている。記録された当時の記憶はそのままでも、その後の社会の変化のなかで評価は変わっていく。その変化の理由を考えるのもまた楽しいと思う。

山形国際ドキュメンタリー映画祭

<公式ホームページをご覧ください>

